日清戰爭　紀伊の國

替え唄

明治廿七年七月　　三代目　松鶴作

日の本は大和魂を皆こゝに、出させ給ふは戰爭なり。不覺は朝鮮より始まりて、偖て豐島の戰さには、保たゞ一時に皆逃げる、聞くより嬉び御祝ひは、勝つとは剛氣ぢや、大鳥樣、救けて吳れいの白旗ぢや、勝づめ是れまで敗けは無し、

合ｍチャン〳〵坊主は大敗軍

なか〳〵全く、海軍に榎本樣、陸軍福島さんに、摑まれて、困り泣いたる支那の醜態

口入屋

笑福亭　松鶴

朝賀大鱗書

ヘイ。口入屋と云ふお噺を一席演らして頂きます。從前大阪では四月と十月が女中の出替り月で御座りましたが、どちらも能う雨の降りまする時季で、此季節を前垂れ被りと申します。女中衆が目見得に往くのに、佳い着物を着て參りますが、途中で此雨に遇ひますと前垂れを被りますので、左樣申した相でムります。船場の口入屋で、表の間には奉公先を待て居る女中が、仰山寄てワヤ〳〵喋て居りますと、此方には一段高い處、恰度風呂屋の番臺見たいな處へ結界を引廻して、机を前に番頭が女護の島の取締り見たいな顏して居ります。番頭「コレ。お前等もうちつと溫柔しう出けんか。八ケ間敷いてどむならんがナ。役者の噂かいな。何、葉村屋が死で惜しいてかい。お前が惜しがらいでも、仕打が惜しがつてるわいナ。何ぢやて、落語家の松鶴に後ろ幕を仕て遣り度い。出來へん〳〵。誰や此ん